

## 現代イスラエルのイラク系ユダヤ人作家 —サミー・ミハエルとその作品—

天野 優

同志社大学大学院神学研究科博士前期課程

### 要旨

イラクのユダヤ人コミュニティは、長い歴史と伝統を誇るコミュニティとして知られていたが、1950年代初頭の時点でその大部分がイスラエルへと移民してしまう。本論文で扱うイスラエル人作家サミー・ミハエルも、イラクからイスラエルにたどり着いたユダヤ人の一人である。彼の作品では、イラクでかつてユダヤ人が営んでいた生活、イラクからイスラエルへやって来た移民が直面した葛藤、イスラエル社会のマイノリティなどが扱われている。その独自の主題設定やイスラエルの諸問題に対して積極的な発言をする姿勢によって、ミハエルは現代イスラエル文学において最もよく知られた作家の一人となった。

本論文では、まずイラクのユダヤ人がイスラエルへ集団で移民するまでの経緯を概観する。そして、そうした時代を生きたミハエルの体験が色濃く反映された作品における、イラクからの移民やイスラエル社会の周縁部に位置する人々の描写を考察する。また最後にこれまでイラク系ユダヤ人を歴史学や社会学の視点から考察する際の副次的資料として扱われがちであったミハエルの作品が持ち込みうる新たな視点の可能性についても触れたい。

### キーワード

イラク系ユダヤ人、ファルフード、マアバロート、現代イスラエル文学、サミー・ミハエル

## **An Iraqi Jewish Writer in Israel: Sami Michael and His Literary Works**

Yu AMANO

MA Student

Graduate School of Theology, Doshisha University

### **Abstract:**

The Jewish Community of Iraq was one of the oldest among the Jewish Diaspora and was historically significant. In the beginning of the 1950s, however, the majority of the Jews of Iraq (more than 120,000) immigrated to Israel due to an increasing anti-Jewish sentiment in Iraqi society. Sami Michael (1926- ), an Iraqi Jewish intellectual who is a well-known writer and influential public figure in contemporary Israel, also found refuge in Israel in the same period.

In this paper I will first trace major historical events that occurred during the first half of the 20th century in Iraq, particularly the pogrom “Farhūd” carried out against Jews in Baghdad, in order to grasp the motifs portrayed in Michael’s works. Secondly, I will shed light on the voices of his characters who are marginalized from society, and analyze how Michael describes both Iraq and Israel.

Attempts have been made to research Iraqi Jews from various scholarly approaches such as history, sociology, and political science, but the literary works of Iraqi Jewish writers, one of whom is Michael, have been treated only as secondary sources. In the conclusion I will suggest the possibility of an alternative approach to Michael’s works from a literary point of view.

### **Keywords:**

Iraqi Jews, Farhūd, Ma‘abarot, Contemporary Israeli Literature, Sami Michael

## はじめに

イスラエル建国以前、中東イスラーム世界には多くのユダヤ人コミュニティが存在した。なかでもイラクのユダヤ人コミュニティは、紀元前6世紀のバビロン捕囚に端を発すると言われる最も古い離散民のコミュニティであった。かつてバビロニア・タルムードが編纂された地として、ユダヤ教の観点から重要視されてきた地でもある。近代以降イラクのユダヤ人は、他のアラブ諸国のユダヤ人に比べ、ムスリムが大多数を占める社会において経済的・社会的に成功する者が多かったことも特筆すべき点である。また20世紀初頭のイラクで多くのユダヤ人が積極的にアラビア語で文筆活動を行い、豊かな文学の伝統があった<sup>1</sup>。本稿で扱うサミー・ミハエルもそうした土壤に学んだ一人である。

上記の理由から本稿では、数あるユダヤ人コミュニティの中でも特にイラクのユダヤ人に限定して論じる。まず、2500年以上続いたイラクのユダヤ人コミュニティが、1950年代初頭に集団でイスラエルへ移民するに至った経緯を「ファルフード」と呼ばれるユダヤ人虐殺事件を軸に据えて考察する。その後イラク系ユダヤ人作家の中でも特にサミー・ミハエルを取り上げ、その主な作品の中でイラクからの移民やイスラエルのマイノリティがどのように描写されているのかを考察する。そうした背景を踏まえたうえで、ミハエルの作品における新たな読みの可能性について、これまでミハエルを含む中東イスラーム世界出身のユダヤ人作家たちが現代イスラエル文学という文脈でどのように位置づけられてきたのかを考慮に入れつつ検討する。

イラクのユダヤ人コミュニティや集団移民、イスラエル社会のイラク系ユダヤ人を扱った先行研究はヘブライ語、英語ともに豊富である<sup>2</sup>。彼らの文学も様々な文脈で引用されてはきたが、イラク系ユダヤ人を歴史学や社会学の視点から考察する際の副次的な資料として言及されることが多く、文学に焦点を絞った先行研究は限られているのが現状であり<sup>3</sup>、ナンシー E. バーグによる書籍が二冊出版されたのみである。本稿では今後の課題として、そうしたこれまでの先行研究に加え、作品に目を向けることで得られる新たな理解の可能性を検討したい。

## 1. イラクのユダヤ人コミュニティ

### 1-1. ファルフード

1869年のスエズ運河開通<sup>4</sup>を契機に貿易が盛んになりイラクの近代化が進むにつれ、ユダヤ人の都市部への移住が進み、インドを始めとする各地のユダヤ人コミュニティとの繋がりを強みに商業で財を成す者が増え始めた<sup>5</sup>。この時期以降、イラクにおけるユダヤ人の社会的・経済的境遇が改善されることとなる。イラク

社会の変容に伴う信仰生活の変化やアラビア語教育の普及によって、世俗化が進む<sup>6</sup>。20世紀前半にはユダヤ人たちの間に「イラク人」として自覚する者も現れ始めた<sup>7</sup>。こうしたユダヤ人たちの多くは、新たな展開を迎えたイラク社会で大いに存在感を發揮し、その活動分野は商業・金融・政治など多岐にわたった。移民前夜1948年の人口統計<sup>8</sup>によると、当時のイラクのユダヤ人人口は約11万8千人（全人口の約2.6%）であり、そのほとんどがモースル、バグダード、バスラといった大都市に居住していた。

当時イラク社会における存在感を増しつつあったユダヤ人たちに大きな衝撃を与えた事件が、ファルフード（Farhūd）<sup>9</sup>である。ファルフードとは、1941年6月1日、ユダヤ教の祭日シャヴオート前夜にバグダードで起こった、ユダヤ人虐殺事件である。イラク近代社会の発展に多大な貢献をし、その繁栄を享受していたはずのユダヤ人がなぜ暴力の対象となったのかを理解するためには、当時のイラク国内政治をふり返る必要がある。

1932年に、王国としてイギリスからの独立を果たしたイラクでは、アラブ民族主義者を中心にかつての宗主国であるイギリスの介入を排除しようという動きがみられた。そうした動向に理解を示したガージー1世（在位1933-1939年）治世下のイラクでは、中東地域におけるイギリスやフランスの台頭に危機感を抱くナチス・ドイツと、アラブ民族主義者の利害が合致し、それに付随して反セム主義が波及しはじめる。そして1940年には、こうした流れに同調するラシード・アリー・アル・ガイラーニーがクーデターにより政権を奪取、首相に就任し<sup>10</sup>、親ナチスの政権が誕生する。しかしその後間もなく、介入の好機をうかがっていたイギリス軍と、親ナチス政権率いるイラク軍との間で衝突が起こり、首相のラシード・アリー・アル・ガイラーニーをはじめとする親ナチスの政治家や要人たちは国外へ出奔する事態となった。イラク国内は事実上無政府状態に陥り、その混乱のなかファルフードが起こった。まもなくバグダードには再び秩序が取り戻されたが、2日間で150人以上のユダヤ人が殺戮され、数百人から数千人が怪我を負い、多くの女性が性的暴行の被害に遭った。ユダヤ人が経営する店舗は荒らされ、経済的被害も甚大であったという<sup>11</sup>。

列強の覇権争いに乗じてヨーロッパの産物である反ユダヤ主義がイラクへ持ち込まれたという事実に加え、1936年にエルサレムの大ムフティであったハーッジ・アミン・アル・フサイニが徒党を率いてイラクへやって来たことも着目すべき点である<sup>12</sup>。彼は前述のラシード・アリー・アル・ガイラーニーのクーデターを支援し、パレスチナ民族運動を鼓舞する活動を行った人物である。ファルフードはこうした外的要因に加え、不安定な政治の下で蓄積された民衆の不満が誘発した事件であって、しばしば引き合いに出されるホロコーストとは性質が異なる

ものであったといえる。しかしながら、経済的に成功し、イラク社会で高い地位を得たイラクのユダヤ人が、そうした不安定な状況では依然として妬みや鬱憤晴らしの対象になりやすい立場にあったことは明らかである<sup>13</sup>。

ファルフードは、バグダードのユダヤ人のみならずイラク全土のユダヤ人コミュニティを震撼させた。また、イラクのユダヤ人たちの間に芽生え始めていた「イラク人」としてのアイデンティティ<sup>14</sup>を根本から揺るがすことにもなった。つまり、ユダヤ人がイラク社会の一部となることが本当に可能なのか、という疑問が生じたのである。その結果イラクのユダヤ人の間では、政治活動を通して解決策をみいだそうとする動きがみられ始めた<sup>15</sup>。

## 1-2. シオニズム

そうした動きの一つが、シオニズムである。イラクのユダヤ人の間では、20世紀初頭の時点でも政治的シオニズムはあまり浸透していなかった<sup>16</sup>。以前からヨーロッパのユダヤ人社会との間に交易や留学などを通じて少なからず接触はあったものの、イラクのユダヤ人コミュニティはヨーロッパの価値観や思想と自分たちの伝統や信仰との間に境界線を引き、区別していた傾向があった<sup>17</sup>。ファルフード以前にもシオニスト組織は存在したが、ユダヤ系学校でのヘブライ語教育など文化的な活動がその大半を占め、具体的な政治性をおびはじめるのは1941年のファルフード発生後に移民や自己防衛の必要が生じてからであった<sup>18</sup>。イラク政府からの弾圧を受けつつも地下活動を続けたシオニスト組織は、1942年にパレスチナのシオニスト機関から密使を迎える。このように、イラクのシオニスト組織の権限は次第にパレスチナのシオニスト機関へと移っていくことになり、最終的に1950年代の集団移民へと結実することとなる<sup>19</sup>。

## 1-3. 共産主義

一方シオニズムとは真逆の方向性を持ち活動していたのが、イラクの共産党とその周辺組織である<sup>20</sup>。シオニズム組織はユダヤ人のみで構成されていたのに対して、イラク共産党は宗教・民族にかかわらずイラク社会を変革したいと望む者の集まりであり、その考えに共鳴し活動に身を投じるユダヤ人の若者も多かった。特にイラク共産党から派生組織として設立された反シオニスト同盟は、その構成員の多くをユダヤ人が占めていた。同盟は、イラクのユダヤ人はアラブ人であると同時にユダヤ人でもあり、故にシオニズムはアラブとその統一にとって、さらにはユダヤ人にとっても危険であるとし、ユダヤ人問題の原因である社会体制の変革を唱えた。同盟はシオニズムを「植民地主義的搾取を行う運動」と規定し、ユダヤ人とシオニストを混同する風潮を避けようと様々な活動を行ったが、設立

から約 1 年で活動停止へと追い込まれてしまう<sup>21</sup>。共産党自体はその後も活動を続けるが、1948 年に民衆蜂起を先導したとして党員の逮捕が相次いだうえ、後に述べるように、活動に従事していたユダヤ人のほとんどは、イラクを去りイスラエルへ移ることを余儀なくされる。

#### 1-4. イスラエルへ

これら相反する二つの潮流に加え、特に上流階級を中心に、ファルフードの衝撃をなるべく早く忘れ去り再び元の生活を営もうとした者も存在した。このように、ファルフードの受容やその後の生活に起こった変化は個人間で異なっていた。ファルフード後、シオニスト機関が活動を本格化させたが、イラクのユダヤ人の大半はシオニズムには無関心のままであった。しかし 1948 年、パレスチナで戦争が始まり、アラブ勢力が苦戦を強いられるようになると、イラク国内におけるユダヤ人への風当たりは強くなるばかりであった<sup>22</sup>。それに伴い、非合法の出国を企てるユダヤ人の数が急増した。こうした状況を受け、ユダヤ人と共に豊富な資産が国外に流出するのを恐れたイラク政府は、1950 年に『国籍剥奪法』を制定した。これはイラク国籍を破棄する代わりに出国を許可されるという法であった。この法の制定をきっかけに、イラク政府・イスラエル政府の予想を上回る大量の申請が殺到し、1950 年から 1951 年という短い期間で、イラクに留まることを願っていた者を含め当時 13 万人程あったイラクのユダヤ人人口のほとんどがイスラエルへと移民する結果となった<sup>23</sup>。こうして、2500 年以上の歴史を誇ったユダヤ人コミュニティはイラクを去ったのである。

## 2. イスラエルへの移民

### 2-1. マアバロート

マアバロート (Ma'abara、複数形 Ma'abarot: 語根の'／b／r は変遷、移行の意味を持つ) は、終戦後 1950 年代のイスラエルで、各国から移民もしくは難民としてやって来たユダヤ人たちを受け入れるため設置された新移民受け入れ仮設住宅のことである。1950 年から 1951 年にかけての大量移民でイスラエルにやってきたイラクのユダヤ人も、これらマアバロートで新たな生活を始めたのであった<sup>24</sup>。マアバロートは、一様に簡素な作りの小屋やテントで構成されており、その生活環境はお世辞にも良いとは言いかねる状況であった。当時のマアバロートでの生活の記録として、Berg (1996) はシュロモ・ヒレル<sup>25</sup>の手記を引用している。

…最も困難であったのは、一時収容所の状態であった。船や飛行機でやって

来たばかりの移民たちはトラックで（当時バスは贅沢だと考えられていた）郊外に点在する施設へと連れて行かれた。そこでアスベスト作りの小屋や、イギリス軍が置いていったぼろぼろのテントに全員一赤ん坊から老人まで一が押し込まれた。この仮住まいのために与えられた家具類といえば、幅狭の鉄製簡易ベッドと、藁でできたマットレスだった。水道とトイレは…広大な施設の敷地のはずれの方に位置していて、たどり着いたとしても天候にかかわらず長い列に並んで待たなければならなかった…<sup>26</sup>

イスラエルへのアリヤー前には、大部分のユダヤ人がバグダードやバスラ、モースルといった都市部に居住しており、比較的整った環境で暮らしていたので、移民後の狭い小屋やテントといった衛生設備もままならないマアバロートでの生活に、落胆する者も少なくはなかった。

## 2-2. 同化をめぐる葛藤

マアバロートでの生活は、イラクのユダヤ人にイスラエル社会への同化を促す過程の始まりでもあった。彼らはこの過程を通してアイデンティティの葛藤につながる様々な問題に直面する。

同化の促進はかねてよりイスラエルで生活を営んできたヨーロッパ出身のユダヤ人やイスラエル生まれのユダヤ人によって先導されたので、そこには価値観の相違による摩擦が生じ、イラクのユダヤ人たちが築いてきた伝統やアイデンティティを揺るがすこととなった。Berg (1996) は、同化を促進する過程そのものに、すでに階層構造が含まれていたと指摘している。つまり、そこには同じユダヤ人、イスラエル人でありながら、受け入れ啓蒙する側と、助けられる劣った側という、異なる二つの社会的立場が成立してしまったのだと批判しているのである<sup>27</sup>。生まれ育った土地から突然去らざるをえなくなったショックに加え、新たな生活で直面した困難やアイデンティティの危機は、イラクからやって来た多くのユダヤ人の心に暗い影を落とした。

## 2-3. 言語の選択

ヘブライ語という新たな言語の習得も、イラクからの移民が直面した困難の一つであった。イラクでアラビア語を母語としていたユダヤ人の多くは、現代ヘブライ語の知識が無いまイスラエルへやって来た。それゆえ、自由に操ることのできないヘブライ語と、敵国言語とみなされがちであったアラビア語との間で、ジレンマに陥り焦燥感を募らせた<sup>28</sup>。

かつてアラブ文学、特にフィクションの分野の発展に貢献したイラクのユダヤ

人作家や知識人は、イスラエルへ移民したのち、どの言語を用いてイスラエルで著作活動を行うのか、という問いに直面した。結果的に彼らは、あえて母語であるアラビア語で書き続けることを選んだ者やヘブライ語習得が叶わずアラビア語で書き続けることしかできなかった者と、新たに習得したヘブライ語で執筆することを選んだ者という、二つの異なる方向へと分岐していく。

### 3. サミー・ミハエル

#### 3-1. 略歴<sup>29</sup>

サミー・ミハエル<sup>30</sup> (Sami Michael) は 1926 年、イラクの首都バグダードのユダヤ人地区にて生を受けた。生家は伝統的ながらも比較的緩やかな宗教観をもつ家庭であったという。ファルフードが起こった 1941 年の時点では 14 歳であり、道中反乱に遭遇したが、反ユダヤ的スローガンを叫び略奪者の群れに紛れ込むことで切り抜けたという。その後、共産主義運動に積極的に携わるようになる。1946 年頃から新聞などに執筆記事が掲載され始め、これが文筆活動の始まりとなった。次第に本格的に政治活動へ身を投じるようになった 1948 年、イラク政府に追われる身となり、逮捕を免れるためにイランへ密出国する。その後 1 年間でテヘランで過ごし、その後イスラエルへとやって来た。テヘラン在住時にアラビア語で数作品を著作したそうだが、イスラエルへ移る際破棄してしまったという。

イスラエルに移民後、ハイファのアラブ人地区ワディー・ニスナスに居を定め、地元の共産党<sup>31</sup>に所属しアラビア語の機関紙である『アル・イツィハード (Al-Ittihad)』『アル・ジャディード (Al-Jadid)』の編集者として働く。その間、サミール・マーリドというペンネームで、文芸欄や短編小説、ルポルタージュなどをアラビア語で手がけた。しかし 1955 年に共産党を離れ文学からも距離を置く。15 年以上にも及ぶ作家としての沈黙期間を経て 1974 年、46 歳にしてヘブライ語での処女作『平等な、そしてもっと平等な人々 (šavim ve-šavim Yoter)』を出版し、本格的に作家としての活動を始めた。その後の作品は全てヘブライ語で執筆している。なお、アラビア語圏初のノーベル文学賞受賞者であるエジプト人作家ナギーブ・マフフーズのカイロ三部作をヘブライ語へ翻訳するなど、アラビア語を用いた活動も度々行っている。また、これまでに国内外で様々な賞を受賞している。現在にいたるまで、小説のみならず新聞やその他メディアで、現代イスラエル社会が直面する様々な問題に関する発言をすることも多く、近年は「イスラエルにおける市民権組合 (ACRI: The Association for Civil Rights in Israel)」の会長を務めている。

### 3-2. 転換点としての「マアバロート」

前章で述べたマアバロートでの経験の後、イラクからやって来たユダヤ人の中から、マアバロートでの生活を題材としたヘブライ語のフィクションを綴る作家が現れる。1974年に出版されたミハエルのヘブライ語での処女作である『平等な、そしてもっと平等な人々 (šavim ve-šavim Yoter)』<sup>32</sup>も、そうした作品の一つであった。建国以前からシオニスト的動機でイスラエルへ移住していた人々(主にアシュケナジームと呼ばれる、ヨーロッパ出身のユダヤ人)とイラクなど中東イスラーム世界からの移民との間に生じた価値観の相違や、マアバロートでの劣悪な生活環境、アイデンティティの葛藤といったテーマを軸に描いているのが特徴である。マアバロートを扱ったヘブライ語の小説を最初に出版したのはシモン・バラス (Shimon Ballas) で、その後ミハエルやエリ・アミール (Eli Amir) といった、イラク系ユダヤ人の作家が続いた。

これらの作家が著した作品は、イスラエルの文学に新たな個性をもたらした。そもそも現代ヘブライ語で書かれた文学というのは、イスラエル建国前にドイツや東ヨーロッパからシオニズムの理念のもと移住してきた世代から始まる。それに続いたのが、イスラエルの地で生を受けヘブライ語を母語として育ち建国に携わることとなるサブラ (šabra) と呼ばれる世代の文学であり、彼らの作品もシオニズムの精神に基づいたものが大半であった。そうしたシオニズムやサブラを主題に書かれるアシュケナジーム主流のイスラエル文学において、イラク系ユダヤ人作家によって書かれたマアバロートを舞台にした作品群は、新たな主人公像を提示したのである<sup>33</sup>。共産主義から身を引くと同時にアラビア語での著作活動に終止符を打ったミハエルが、その後15年以上の沈黙期間の後、マアバロートとイスラエル社会の差別問題をヘブライ語で著すことで文壇へ姿を現したという事実は、ミハエルにとって、個人として、そして作家としての転換点を明確にすることであったと考えられる。

### 3-3. 『庇護 (ḥasut)』<sup>34</sup>

ミハエルが著したイスラエルを舞台にした小説で最もよく知られているものが二作ある。うち一作が1977年に出版された『庇護』である。アシュケナジームのユダヤ人女性シュラを中心に老若男女、ユダヤ人とアラブ人、様々な出自や信仰を持つ人々によって織りなされるこの物語は、登場人物の多くがイスラエルの共産党員である。シュラの夫は、イラク共産主義のもと政治活動に携わり逮捕されて以来、13年間政治犯として収監されその後イスラエルへやって来たイラク系ユダヤ人マルドック、そして二人の間には知的障がいを持って生まれたイドという10歳の息子がいる。突如始まったヨム・キプール戦争の最中、それまで共存の

道を模索し続けていたユダヤ人、アラブ人のイスラエル共産党員が、党の理想と自分たちのアイデンティティ、忠義心の間で錯綜する様子が描かれている。

マルドゥクが軍に招集されたあとシュラの元に、党員仲間が、同じく共産党に属するアラブ系イスラエル人ムスリムである若き詩人ファトヒーを連れてくる。党員の義務として、イスラエル警察に追われる身であるファトヒーを匿うよう指示されたシュラは、マルドゥクなら受け入れたらだろうと考え、ファトヒーをアパートの一室に住ませる。

題名の『庇護』は、13年の収監から突如解放され、行き場を無くしたマルドゥクがイスラエルに居場所を得たように、また逮捕から免れようとしたファトヒーが今や敵となったユダヤ人シュラの懐に隠れ家を得たように、自分の意志にかかわらず与えられた様々な形の「庇護」を指している。また自分の意志で選び取った「庇護」ではないゆえに、いつもある種の葛藤がつきまとう様子も描かれる。

ユダヤ人とアラブ人の男女間の関係が生々しく描かれるのもこの物語の特徴であろう。共産党員であるアラブ人クリスチャン男性フアドと同じく党員であるアシケナジーのユダヤ人女性ショシャナの夫婦は、こうした男女の厳しい現実を体現した存在として描かれている。戦争勃発とともにアラブ人の父親とユダヤ人の母親をもつ息子たちの間で険悪な雰囲気が漂い始め、ついに長男は自分を「ユダヤ人の母親から生まれたユダヤ人」と定義し、イスラエル軍に参加しようとする。一方自分たちを「アラブ人だ」とする次男や三男は、長男や母親に罵声を浴びせる。

二人目の子供を妊娠していることに気付くシュラはマルドゥクの帰還を待ちわびるが、安否は知らされないまま途方に暮れる。登場人物それぞれの間に、不穏な決裂の空気を残したまま物語は結末を迎える。

### 3-4. 『ワディのトランペット (ḥaṣoṣrah ba-Wadi)』<sup>35</sup>

もう一作は1987年に出版された『ワディのトランペット』である。後に映画や舞台にもなり、2012年にアム・オヴェド社が創立60周年を記念して、過去の出版物のうち最も人気のあった6作品を装丁新たに刊行した際、そのうちの一冊に選ばれたことも、初版以来この作品が幅広く読まれてきたことを示している。ミハエル自身も移民後の数年間を過ごしたハイファのアラブ人地区、ワディー・ニスナスが舞台となっている。そこに暮らすアラブ系イスラエル人キリスト教徒の女性フダと、彼女が家族と住むアパートの屋上に引っ越して来たロシア系ユダヤ人移民の男性アレックスとの関係を軸に、物語は進んでいく。フダは、イスラエルに移民して来たばかりのロシア系ユダヤ人アレックスが屋上でトランペットを吹いているのを耳にする。お互いに興味をもち始めた二人の距離は縮まっていく

が、フダの家族はユダヤ人の男性と親しくするフダにいい顔をしない。その後、様々な困難を乗り越え家族の信頼を勝ち得た二人は晴れて結ばれるが、物語の結末は思わぬ方向へ向かう。戦争が始まると同時にアレックスは招集され、そのままレバノンで帰らぬ人になってしまうのである。そしてフダは自身が妊娠していることに気付く。アレックスの墓の前に立ちフダは語りかける。

この子の将来はどうなるのだろう、私はこの子を、アラブ人として育てるべきなのか、それともユダヤ社会で育てる方がこの子のためになるのだろうか。アラブ人の間でも、ユダヤ人の間でも、この子はよそ者になってしまうのだろう。

前に挙げた『庇護』を見ても明らかなように、ミハエルはしばしばユダヤ人とアラブ人の男女の関係を描いている。これらの小説は、イスラエル社会には、同じイスラエル国籍を持ちながらも宗教的・民族的出自の違いによって断絶された、決して交わることのない階層が存在する、という事実を浮き彫りにしている。『庇護』、『ワディのトランペット』どちらの結末においても、ミハエルは極めて現実的である。身重のシュラはマルドゥクの安否を知らされないまま息子と二人取り残され、同じく身重のフダは帰らぬ人となったアレックスの墓の前で子供を産むべきかどうか決めかね語りかける。ミハエルは、フィクションだからといって幸福な結末を描こうとはしない。むしろこのような現実的な結末を書くことで、内部に複雑な階層構造や差別を内包している現代イスラエル社会を批判しているのではないだろうか。

### 3-5. イラクを扱った作品

ヘブライ語で執筆を始めた後も、ミハエルはイラクを扱った作品を多く著している。1975年出版の『ナツメヤシに吹く嵐 (Sufa ben ha-Dqalim)』は青少年向け、1979年に出版された『一握りの霧 (hofen shel 'Arafel)』は成人向けの小説で、どちらもイラクでのユダヤ人の生活を描いた作品である。ファルフードが起こる1940年代のイラク社会に立ちこめていた不穏な空気、そしてムスリムとユダヤ人の間に生じてしまった深い溝を、共産主義のもと反体制運動に携わるユダヤ人の主人公とムスリムやキリスト教徒の友人との関係を軸に綴った物語である<sup>36</sup>。既に挙げた『庇護』も、イスラエル社会が舞台になってはいるものの、マルドゥクの回想を通してイラクでの出来事が語られるので、イラクを扱った作品の一つとして数えることが可能かもしれない。イラクを舞台にした作品で最も新しいものは、フセイン政権下のユダヤ人男性を主人公に据えた 2008年出版の『アイダ

（‘Aida）』であり、彼が今日までイラクの地におけるユダヤ人の生活に関心を持ち続けていることが明らかである。しかしそれらの作品の中でも最もよく知られており、ミハエルの名を一躍有名にしたのは、1993年に出版された『ヴィクトリア（Victoria）』<sup>37</sup>であろう。

20世紀初頭バグダードのユダヤ人家庭に生まれた少女ヴィクトリアの目を通して、伝統的かつ宗教的な生活を続けている大家族、彼女を取り巻くイラク社会の変容、そしてその後彼女がイスラエルへと移民するまでが鮮やかな筆致で描かれている。『ヴィクトリア』を特徴づけているのは、これが著者自身の経験を自叙伝的に綴った作品ではなく、批判的な視点を含んだ完全なるフィクションであるという点である<sup>38</sup>。10万部を売り上げたこの作品について、イスラエル国内の批評家たちは一様に賛辞を浴びせた。文壇の主流に足を踏み入れてもなお、サミー・ミハエルはマイノリティに力点を置いて描き続けていることが示されたと評価する者もいた<sup>39</sup>。

しかしこれとは別に「アシュケナジームに気に入られようとしている」という声が、特にイラク系ユダヤ人の読者から聞かれた<sup>40</sup>。1998年に開かれた第二回パピロニア・ユダヤ人研究国際会議に参加した臼杵陽の報告<sup>41</sup>によると、『ヴィクトリア』はイラク系ユダヤ人のコミュニティでは酷評と言ってもいい評価しか受けず、ミハエルはアシュケナジーム的作家になってしまい、イラク系ユダヤ人女性の実像とは全く関係のない、アシュケナジームにすり寄って彼らにわかりやすいイラク系女性の偏見を帯びた類型を作り上げた、との批判があったという。このような批判は、この小説がかつてイラクに存在したユダヤ人家族の伝統的な価値観に疑問を投げかけ、また官能的な描写を多くもちいたことに端を発していた。

## おわりに

ミハエルは常に、居場所の無さを抱えた人々や狭間でもがく人々の声を、小説を書くことによって掬い上げてきた。マアバロートにおけるイラクからの移民、イスラエル社会のアラブ人や共産黨員、かつてイラクでマイノリティとして生きていたユダヤ人など社会の周縁部に位置する人々に目を向け描くその筆致は端的であり、体制に対する鋭い批判を含んでいる。

しかし一方で、『ヴィクトリア』に対して向けられたような、否定的な声が聞かれることも事実である。「アシュケナジームに気に入られようとしている」や「アシュケナジーム的作家」とは何を意味するのか。これに加え興味深いのが、ミハエルの作品をしばしば「シオニスト的」であり「シオニスト・ナラティヴを取り入れ成功した」と批判する先行研究や評論がいくつかあるという事実である<sup>42</sup>。イ

スラエル社会で発言力を持つ知識人の一人となったミハエルは、アシュケナジームの影響が強いイスラエル文学の主流に迎合することで、イスラエル社会へ順応を果たしたのだろうか。

ミハエルのイスラエルそしてイラクの描写に、この問いを理解する手がかりが見いだせるかもしれない。ミハエルのイスラエルを扱った作品を見ると、フィクションだからといって決して幸福な結末を用意しているわけではないことがわかる。むしろ、登場人物たちをイスラエル社会の厳しい現実のなかに取り残したまま物語は終盤を迎えている。このことは、ミハエルが必ずしもイスラエルに対して理想を抱いているわけではないことを表しているのではないだろうか。また『ヴィクトリア』に代表されるイラクを描いた作品は、単に失われた母国へ対する自らの郷愁に誘発された「過去の再構成」ではない。むしろ、当時の状況を現在にまで至る道筋の出発点として描き、イラクとイスラエルを断絶したものとして扱うのではなくあくまで一連のものとして捉え、ヘブライ語で読む読者のことを想定して書かれたフィクションである<sup>43</sup>。ミハエルは、1984年に発表した『イスラエルにおいてイラク系ユダヤ人作家であること (On Being an Iraqi Jewish Writer in Israel)』というエッセイにおいて、以下のように語っている。

いかにイラクでの生活にあった、あの素敵なもの、美しいもの、魅力的なものを、俗っぽい郷愁に陥ることなく描けるだろうか。どうすれば同郷の移民たちのプライドを傷つけず、その劣等感を深めることなく、また同時にもう一方の側（アシュケナジーム）の優越感を助長させることなくかつての生活の実態を伝えられるだろうか<sup>44</sup>。

この言葉は、ミハエルの現在の視点の在り処はイスラエルであり、彼がイスラエルにいるヘブライ語を解する読者に宛てて執筆していることをはっきりと裏付けている。しかし同時に前に述べたミハエルのイラクとイスラエルの描写も考慮に入れると、彼がそのどちらをも絶対視していないことを示唆しているようにも思われる。アイデンティティの礎であるイラクと、自身に存在する場所を与えたイスラエル、隔絶してしまった二つの世界をつなぐ、中間となる「場」を、ミハエルはフィクションを著すことを通して自らの作品の中に作り出そうとしてきたのではないだろうか。

ミハエルがイスラエル文学において長く支配的である「シオニスト・ナラティブ」を受け入れたという可能性を一概に否定することはできないであろう。しかし「アシュケナジーム的」な作家になったという点には疑問が残る。マアバロートを描いた作品以来、ミハエルに代表されるイラク系ユダヤ人の作家が、アシュケ

ナジームが主導するイスラエル文学の主流に一石を投じることで新たなイスラエル文学のあり方を切り拓いてきたことは紛れもない事実である。このことから、むしろミハエルの作品群はそれまで「主流」と言われていた物語の幅を広げたと捉えることはできないだろうか<sup>45</sup>。

以上の批判や考察を踏まえ、今再びミハエルの作品は綿密に読み込まれるべきである。本稿の前半部で概観したように、イラクのユダヤ人がイスラエルへ移民する過程を知ることは、ミハエルの作品における特殊な主題とその性質をよりよく理解するために重要である。しかし一方で、イスラエル国内に限らず広く読者を増やしているミハエルの作品には、主題の特殊性を越えるより普遍的な価値があるとも考えられる。作品を読み進め分析し、そうした側面を探求していくことを今後の課題としたい。

## 註

- <sup>1</sup> 19世紀末よりエジプトで「アル・ナフダ（アラビア語で覚醒を意味する）」と呼ばれる文芸復興運動が始まり、その影響を受けたイラクでも、1920年代以降従来のアラビア語文学には見られない新しい様式に則った現代小説が興る。イラクのユダヤ人作家たちは特に短編小説の分野で活躍し、その水準は他のアラブ諸国のユダヤ人作家たちに例を見ない程高かったという。以下に詳しい。Nancy E. Berg, *Exile from Exile: Israeli Writers from Iraq* (Albany: State University of New York Press, 1996), pp. 29-39; Reuven Snir, “‘Religion is for God, the Fatherland is for Everyone’: Arab-Jewish Writers in Modern Iraq and the Clash of Narrative after Their Immigration to Israel,” *Journal of American Oriental Society*, Vol. 126, no. 3 (2006), pp. 384-388; Norman A. Stillman (ed.), “Arabic Literature (Modern), Jewish Writers,” in *Encyclopedia of Jews in the Islamic World* (Leiden: Brill, 2010), vol. 1, pp. 240-244.
- <sup>2</sup> 日本語で入手できるものとして以下が挙げられる。臼杵陽「セファラディームおよびミズラヒームに関する研究動向—ヘブライ語雑誌『ペアミーム』を手がかりにして」『佐賀大学教養学部研究紀要』第25巻、1993年；『見えざるユダヤ人：イスラエルの《東洋》』平凡社、1998年；「イラク系ユダヤ人研究国際会議参加記」『ユダヤ・イスラーム研究』第17号、1999年、52-68頁。
- <sup>3</sup> イラク系ユダヤ人の文学に焦点を絞った先行研究として以下が挙げられる。Nancy E. Berg, *Exile from Exile: Israeli Writers from Iraq* (Albany: State University of New York Press, 1996); Nancy E. Berg, *More and More Equal: The Literary Works of Sami Michael* (Idaho: Lexington Books, 2005); Reuven Snir, “‘Religion is for God, the Fatherland is for Everyone’: Arab-Jewish Writers in Modern Iraq and the Clash of Narrative after Their Immigration to Israel,” *Journal of American Oriental Society*, Vol. 126, no. 3 (2006), pp. 379-399; Reuven Snir, “Arabic Literature by Iraqi-Jews in the Twentieth Century: The Case of Ishaq Bar-Moshe (1927-2003),” *Middle Eastern Studies*, vol. 41. 1 (2005), pp. 7-29.

- <sup>4</sup> スエズ運河が開通した当時、現在のイラクはオスマン帝国の一部であった。当時のバグダード総督は後にアジア初の憲法を起草する、ミドハト・パシヤ（在職 1869—1872 年）であり、彼の統治のもと教育制度の改革など、近代化が始まった。Berg, *op. cit.*, 1996, p. 19.
- <sup>5</sup> こうした商業のネットワークは、インド、極東、イギリスにまで広がっていた。Berg, *op. cit.*, 1996, p. 18. なお、アジア・アフリカのユダヤ人が、商業のために各国のユダヤ人コミュニティと密接な関係を保っていたのはこの時代に限った話ではない。中世のアジア・アフリカ地域における活発な商業取引については、以下に詳しい。S. D. Goitein, *A Mediterranean Society: The Jewish Communities of the Arab World as Portrayed in the Documents of the Cairo Geniza*, vol. 1-6 (Berkeley: University of California Press, 1999).
- <sup>6</sup> 近代的な教育の普及、特にユダヤ教の安息日である土曜日にも授業があった国営の学校への就学が、世俗化を促した。また、1908 年に起こった青年トルコの革命の後に制定された新憲法で、ユダヤ人の権利と平等が保障され社会進出が進み、イギリス資本の会社などで土曜日にも働く必要がある場合に、安息日を守らないことが多くなった。Berg, *op. cit.*, 1996, p. 20.
- <sup>7</sup> ルーベン・スニールは、論文のタイトルにもなっている “Religion is for God, the Fatherland is for everyone (al-dīnu li-llāhi wa-l-waṭanu li-l-jamī’)” 「宗教は神のために、祖国は皆のために」というフレーズを引用し、20 世紀の前半バグダードに満ちていた、かつてのアンダルシアを彷彿とさせる共存の可能性を、文化が宗教から乖離した世俗的風潮の賜物だとする。こうした傾向は長くは続かなかったが、その短期間に多くのユダヤ系知識人が、フスハー（正則アラビア語）で文筆活動をし、またアラビア語を話す「イラク人」としての自覚を持ちつつあった。Snir, *op. cit.*, 2006, pp. 379-399.
- <sup>8</sup> Fred Skolnik (ed.), “Iraq,” *Encyclopedia Judaica*, vol. 10, pp. 14-24.
- <sup>9</sup> ファルフードについては以下の論集に詳しい。Shmuel Moreh & Zvi Yehuda (eds.), *Al-Farhūd* (Jerusalem: Magnes Press, 2010). なお「ファルフード」という単語は、アラビア語化されたクルド語であり、無制限の虐殺、燃焼、略奪、粗暴者による性的暴行などを意味するという。Shmuel Moreh, “The Pogrom of June 1941 in the Literature of Iraqi Jews in Israel,” *Al-Farhūd: The 1941 Pogrom in Iraq*, 2010, p. 242.
- <sup>10</sup> ハーჯ・アミーン・アル・フサイニーの支援を得て選出される。以下に詳しい。臼杵陽「第二次世界大戦期ドイツにおけるパレスチナ人指導者：ハーჯ・アミーン・アル・フサイニーとナチスの関係をめぐる最近の研究動向」『経済志林』第 79 巻、第 4 号、2012 年、113-140 頁。
- <sup>11</sup> 被害の具体的な数字は資料によってばらつきがあるが、死者数はどの資料も 150 人前後と記録している。
- <sup>12</sup> 臼杵、前掲論文、2012 年。
- <sup>13</sup> 臼杵は「ファルフード」の孕む問題性について、「その後『ポグローム』から『ホロコースト』へ」という、アラブ世界における反ユダヤ主義の興隆の前兆として、アラブ・イスラエル紛争の中で政治的、イデオロギー的に利用されたことであり、また、ミズラヒームにとっての『ホロコースト神話』の拠り所になった点も指摘しておく必要がある。

- るだろう」と述べている。白杵、前掲論文、1993年、139頁参照。
- <sup>14</sup> イラクが王国としてイギリスから独立を果たした後、ユダヤ系知識人の中から自らを「アラブのユダヤ人 (Arab Jew)」と呼ぶ者が現れる。ユダヤ人が自分たちをイラクという国家の国民であるとみなしたのみならず、「アラブ」という民族性まで自分たちのアイデンティティに取り込んだということは、普通ではあり得ないことであったという。Orit Bashkin, *New Babylonians: A History of Jews in Modern Iraq* (California: Stanford University Press, 2012), p. 2.
- <sup>15</sup> シュムエル・モレーはファルフード後のイラクのユダヤ人の傾向を、シオニスト、共産主義者、イラク愛国主義者の三つに分けて説明している。Moreh, *op. cit.*, 2010, p. 213.
- <sup>16</sup> バビロン捕囚で現在イラクと呼ばれる地方へ定住して以来、イラクのユダヤ人コミュニティは常にイスラエルの地との繋がりを保ち続けており、イラクから移住するユダヤ人も少なくなかったが、政治的な意図はなかった。Norman A. Stillman (ed.), “Zionism Among Sephardi/ Mizrahi Jewry,” *op. cit.*, vol. 4, p. 671.
- <sup>17</sup> イギリスやフランスで学業を修め、学校教育や政財界で活躍するイラク人がいた一方で、19世紀ヨーロッパでユダヤ人に多大な影響を与えた啓蒙主義を携え、イラクのユダヤ人コミュニティの西洋化、世俗化を図りバグダードに移住してくる東ヨーロッパのユダヤ人たちもいた。Snir, *op. cit.*, 2006, p. 381 参照。
- <sup>18</sup> イラクのユダヤ人コミュニティは世界シオニスト機構 (WZO: World Zionist Organization) の設立を認知はしていたが、実際に連絡を取り始めるのは1913年以降だったという。その後若者と教育機関を中心にヘブライ語教育や移民を宣伝する活動が行われるが、1930年代後半までは目立っていなかった。Norman A. Stillman (ed.), “Zionism Among Sephardi/ Mizrahi Jewry,” *op. cit.*, vol. 4, pp. 671-675.
- <sup>19</sup> Gat Moshe, *The Jewish Exodus from Iraq* (London: Franc Cass, 1997), p. 26.
- <sup>20</sup> 白杵陽「イラク・『ユダヤ人』における反シオニズム運動—第二次世界大戦直後イラクのシオニズム、アラブ民族主義、および共産主義」『佐賀大学教養学部研究紀要』第21巻、1989年、1-26頁。イラク・ユダヤ人による共産主義運動への関わりについて、反シオニズム運動に焦点を当てた研究は限られており、本稿では上記の白杵論文に大きく依拠した。
- <sup>21</sup> 白杵、前掲論文、1989年、9-13頁。
- <sup>22</sup> パレスチナ情勢がイラク国内政治に及ぼした影響は、Moshe, *op. cit.*, 1997, pp. 32-50に詳しい。また、「アラブ民族主義」の定義が次第に狭くなり、ユダヤ人を除くその他の「イラク人」に限られるようになったという事実もある。Snir, *op. cit.*, 2006, p. 388.
- <sup>23</sup> 当時123,500人のユダヤ人がイスラエルへ移り、約6,000人が留まることを選んだという。Fred Skolnik (ed.), “Iraq,” *Encyclopedia Judaica*, vol. 10, pp. 14-24. 1948年から1991年にかけてのイスラエルへの移民数は、モロッコからの移民が最も多く265,300人、ルーマニアから263,576人、旧ソ連200,446人と続く。しかしこれらは散発的に起こった移民の総数であり、イラクのユダヤ人コミュニティのように、1年に満たない短期間で12万人以上の人口がイスラエルへ移動した例はない。Zvi Ben-Dor, “Invisible Exile: Iraqi Jews in Israel,” *Journal of the Interdisciplinary Crossroads, Thematic Issue: “The Limits*

- of Exile*” (eds. D. Kettler & Z. Ben-Dor), vol. 3, no. 1, pp. 145-146.
- <sup>24</sup> マアバロートについては、Berg, *op. cit.*, 1996, pp. 67-71 を参照。当時マアバロートに暮らした移民の中で最も人口が多かったのは、イラクからの移民であった。  
<http://lib.cet.ac.il/pages/item.asp?item=12939> (ヘブライ語) (2014年9月29日取得)
- <sup>25</sup> シュロモ・ヒレル (Shlomo Hillel) は、1923年バグダード生まれのユダヤ人であるが、早くからパレスチナへ移住し、後にイラクのユダヤ人コミュニティをイスラエルへ移送する際 (エズラ・ネヘミヤ作戦)、大きな役割を果たした人物である。イスラエルでは政治家としても活躍した。Berg, *op. cit.*, 1996, pp. 24-26.
- <sup>26</sup> *Ibid.*, p. 67.
- <sup>27</sup> *Ibid.*, pp. 67-70.
- <sup>28</sup> 執筆言語の選択はつまり、読者層の選択でもあった。イラク系ユダヤ人作家の多くはアラビア語で書き続けることを望んだが、ヘブライ語話者が大半を占めるイスラエル社会においては、読者を獲得することが困難であった。
- <sup>29</sup> 様々な先行研究でミハエルの略歴が語られるが、それぞれ若干の違いがある。本稿では Berg, *op. cit.*, 2005, pp. 1-11 を参考にした。
- <sup>30</sup> 出生時の名前は「サーレハ・ケマル・メナシェ・エリヤフ (Saleh Kemal Menashe Eliahu)」であり、ケマルというミドルネームはミハエルの父がケマルアタトゥルクの敬意を示しつけたものだという。サミー・ミハエルという名は、イスラエルへ到着した際提案された名から選んだヘブライ語名である。名前のヘブライ語化 (Hebraization) は、同化への重要なプロセスであった。Berg, *op. cit.*, 2005, p. 4.
- <sup>31</sup> ワディー・ニスナスの市場を抜けると三叉路があり、そこから共産党のシンボルであるアラビア語の و の赤文字が書かれた建物が見える。
- <sup>32</sup> 一次文献を手に入れることができなかつたので、書評を参考にした。Berg, *op. cit.*, 1996, pp. 67-105; Berg, *op. cit.*, 2005; Snir, *op. cit.*, 2006.
- <sup>33</sup> Berg, *op. cit.*, 1996, pp. 67-105.
- <sup>34</sup> Sami Michael, *ḥasut* (Tel Aviv: Am Oved, 1977); Sami Michael, *Refuge* (Philadelphia: The Jewish Publication Society, 1988). 白杵は“ḥasut”を『避難』と訳している。しかし本稿では、より作品の内容を表していると思われる『庇護』という訳語を使う。
- <sup>35</sup> Sami Michael, *Ḥaṣoṣra Bawadi* (Tel Aviv: Am Oved, 2012 [1987]); Sami Michael, *A Trumpet in the Wadi* (New York: Simon & Schuster, 2003).
- <sup>36</sup> 一次文献を手に入れることができなかつたため、書評を参考にした。Berg, *op. cit.*, 1996, pp. 129-149.
- <sup>37</sup> Sami Michael, *Victoria* (Tel Aviv: Am Oved, 1993); Sami Michael, *Victoria* (London: Macmillan, 1995).
- <sup>38</sup> 他にも多くのイラク系ユダヤ人がバグダードやイラクを描いたが、その多くが自叙伝や回想録であった。Berg, *op. cit.*, 1996, chapter 4, 6.
- <sup>39</sup> Snir, *op. cit.*, 2006, p. 394.
- <sup>40</sup> *Ibid.*, p. 394.
- <sup>41</sup> 白杵、前掲論文、1999年。
- <sup>42</sup> 現代イスラエル文学の研究者として多くの批評を発表しているゲルシオン・シェケツ

---

ドはミハエルの『庇護』の結末を「『庇護』は、パレスチナのアラブ人・イスラエル国民・占領下の住人の考えを叙述しているにもかかわらず、結局のところシオニスト的総意を容認する形で終わってしまう」と評する。Gershon Shaked, *Modern Hebrew Fiction* (Bloomington: Indiana University Press, 2000), p. 185. また、ユダヤ系イラク人の文学に関する論考を多く発表しているルーベン・スニールは、ミハエルを、(アラビア語から)「ヘブライ語へと執筆言語を変えることに成功しシオニスト・ナラティヴを取り入れた」作家の一人だとする。Snir, *op. cit.*, 2006, p. 395.

<sup>43</sup> Berg, *op. cit.*, 1996, p. 154.

<sup>44</sup> Sami Michael, “On Being an Iraqi Jewish Writer in Israel,” *Prooftexts*, vol. 4, no. 1, p. 32. なおルーベン・スニールは、ミハエルの他のエッセイと共にこの箇所を引用し、これはミハエルがかつての遅れた社会からより発展した社会へと移行したことにより直面した問題であると述べている。Snir, *op. cit.*, 2006, p. 395.

<sup>45</sup> バーグは、こうしたミハエルの作品は「シオニストの大きな物語 (Zionist Master Narrative)」を脱中心化、さらには脱構築するとし、しかし一方でそれを放棄するわけでもないと述べる。Berg, *op. cit.*, 2005, pp. 191-192. ここでバーグはそうした「大きな物語 (master narrative, meta narrative)」というもののあり方自体に疑問を投げかけている。